

【童貞彼氏と】

甘利くんと紬ちゃん

【初エッチ】

Sample

名埜

「テストお疲れさま」

「乾杯」と、隣に並んで座る百瀬さんと俺のコップが控えめに重なってコップと音を立てる。それは俺の家にある無地のコップとは違って、カラフルな花柄で可愛い。ケーキが乗ったお皿もフォークも、お店みたいにお洒落だなあと思いながら、百瀬さんの家の近くで買ったケーキを一口頬張った。

大学のテスト期間が終わり、百瀬さんが最近お気に入りだというお店でケーキを買って、百瀬さんの家ですごすお疲れ様会をすることにした。

百瀬さんの部屋は、俺と同じワンルームなのにすっきり片付いているし、視界に入るものの全てが可愛い。目の前の白くて小さめのテーブルも丸っこくて可愛いし、それにいつも部屋はなんだかい匂いがするし、何度か来たことがあるけど、まだちょっと緊張する。

「あ、ちよっと雨強くなってきたね」

百瀬さんの言葉に窓の外に目を向けると、ぽつぽつと窓ガラスを雨のしずくが濡らしている。目に入った窓の端に束ねられたレースカーテンも、可愛いなあなんて思った。

「甘利くん、傘持ってきてる？」

「いや、天気予報晴れだったから持ってきてなくて。すぐ止めばいいんだけど……」

「帰るときも降ってたから、私の傘貸すね」

「ありがとう、でも俺が使うには可愛すぎない？」

玄関に置いてあった、花柄の傘を思い出してそう言う「そうかも」と百瀬さんが笑う。もしかしたら、俺がそれを差している姿を想像したのかもしれない。可愛い、とニヤけてしまいそうなのを隠すように、またケーキを口に運んだ。

「ここのケーキ、美味しいね」

「でしょ？ テスト終わったご褒美に、甘利くんと一緒に食べようって決めてたんだ」

「え、俺と？」

「？ うん。甘利くんもケーキ好きでしょ」

「う、うん」

そんな当たり前みたいに百瀬さんの中に俺がいるなんて、付き合ってから月経った今もまだ慣れないというか、信じられない。というのも、彼女という存在は百瀬さんが初めてで、何をするにも未経験な俺は、百瀬さんの言葉にいつも一喜一憂してしまう。

「俺もなんか用意したらよかったね、ごめん」

「私が食べたかったんだからいいんだよ」

「でも……」

ほんと俺って気が利かない。今日テスト終わりに会うことは決めていた

んだから、前もって準備だつてできたはずなのに。いつもうまくいかない。それに、今のも逆に百瀬さんに気を遣わせた気がする。ああもう、これだから童貞は、と心の中で一人自虐する。

「……じゃあ、甘利くんをお願いしてもいい？」
「！　いいよ！　何？」

百瀬さんからお願いなんで珍しい。なんでもする！と言いたかったけど、なんか逆に軽いかな？　いや、考えすぎかな、なんて考えていたら、百瀬さんが小さく口を開いた。

「……、名前で、呼んで？」
「……え？」

突然の言葉に、多分間拔けな声が出たと思う。名前で、呼んで？　……俺が？　百瀬さんのこと、を？

「まだ『百瀬さん』って呼ぶでしょ」

「も、百瀬さんだって」

「……甘利くんが呼ぶからだもん」

「そ、そうかもしれないけど」

「……だめ？」

「だ、だめじゃない、けど」

我ながらなんて齒切れの悪い返事しかできないんだと嫌になる。嫌じゃない、嫌なわけではない。ただ、大学で知り合ってから、ずっと百瀬さんと呼んでいただけに今更気恥ずかしいというか……、いや、そもそも女の子を名前で呼んだことなんてあっただろうか。

そんなことをぐるぐる考えている俺を、何かに期待したような目で、百瀬さんはじっと見つめている。

「……つ、つむ、ぎ、ちゃん」

意を決してめちやくちやにぎこちなく初めて口にした言葉は、辛うじて声になったかというくらい多分小さくて、静かに空気に溶けていってしまったみたいだ。もしかしたらこの距離でも百瀬さんには届いていないかもしれないと思うくらいには。

「あ、あの、」

「……ふふ、なんかくすぐったいね」

そう言って、百瀬さんはふにやりと笑った。あ、ちゃんと聞こえていたんだとか、自分でもびっくりするくらいぎこちなかったなとか色々思ったけど、そんなことよりどこか恥ずかしそうな百瀬さんが可愛すぎて、大げさじゃなくて胸が苦しくて仕方がなかった。

「つ、紬、ちゃん」

「……はい」

「こ、これからも、紬ちゃんって呼んで、いい？」

「もちろん」

いいんだ?! 俺なんかが、紬ちゃんなんて呼んじゃってもいいんだ? うわあ、どうしよう、友達に調子に乗ってるって思われなかな。そんなこと思うような奴はいないかもしれないけど。だとしたら、そもそも俺なんかが百瀬……、紬ちゃんと付き合っている時点で非難を浴びても致し方ないと思うけど。

でも呼び方一つだけど、なんだかちよつと距離が近づいたような、気がする。

「……あの、俺のこと、は」

そこまで言いかけたくせに「蒼佑と呼んでほしい」とは言えなかった。さすがに調子に乗りすぎ? いや、でも俺も名前で呼んでほしい。いや、呼ばれるたびニヤニヤしてしまうかもしれないから、今のままのほうがいいの

かもしれない……

「蒼佑くん」

「え……っ！ はい！」

「ふふ、声おっきい」

「ご、ごめん！」

不意打ちで名前を呼ばれ、先程の声が嘘みたいになバカデカイ声量で返事をしてしまった。生まれて何十回、何百回と自分の名前を聞いてきたはずなのに、紬ちゃんの可愛い声で呼ばれると、ものすごく特別なものみたいな気がしてくる。

「も、もう一回呼んでほしい……っ」

「えっ！」

つい興奮気味に欲のままに言ってしまったけど、さすがに気持ち悪かつ

たかもしれない。でも、もう一回聞きたい、し。

「お、お願い」

「……ちよつと照れちゃうから、また今度」

……ちよつと待って、何だそれ……、何だそれ……?! 照れるとこなの? え、可愛い、可愛い、可愛い!

呼んでもらえないのは残念だったけど、紬ちゃんが可愛すぎて、もうそれだけでいい。

……いや、ごめん、それは嘘。可愛すぎてどうしよう、この溢れそうな気持ちのやり場がない。

(……どうしよう、めちゃくちゃキス、したい)

キスは、まだしたことがなかった。

初めて手を繋いだ時も、尋常じゃなく手汗をかくほどに緊張していたの

に、キスとか……、それ以上のことなんてしたら俺の心臓は止まるんじゃないかって割と真面目に思っていた。

したいって思ったことがないわけじゃないけど、急がなくてもいいかなんて言い訳にして、踏み出せずにいた。けど。

「つ……、紬、ちゃん」

「うん……？」

「キス、しても、いい？」

雨音にかき消されるんじゃないかってくらい、また小さな声になってしまった。

あ、どうしよう、聞いた方が逆に気持ち悪かったかも。だめですって言われたら俺、立ち直れない。でも、いきなりするのもそれってどうなの？ いいの？ 世の男は自然にキスするもんなの？ ああもうこれだから童貞は………！

「……うん」

「え?!」

「ふふ、甘利くんが聞いたのにな?」

「そ、そうだよ、ごめん」

「謝るの無し、ね?」

雨粒が窓ガラスを叩く音が部屋に響く。ドキドキとうるさい俺の心臓の音をかき消してくれていると思えばちよいどいいのかもしれない。

すう、はあ、と小さく深呼吸みたいに息を吐く。紬ちゃんの方へ体を向けると、視線がぶつかる。うわ、目っていつ閉じるんだ? あれ? 閉じていいんだよね?

そつと紬ちゃんに顔を寄せると、紬ちゃんが瞼を下ろした。うわ、睫毛なつが、唇も俺と違つて一つも荒れていない。あ、こんなに観察したいな。ことしてたらさすがに気持ち悪いよね……。あれ、息って止めるのか? ああもう……!

お互いの唇が触れそうな距離で、目をぎゅむ、と閉じる。次の瞬間、ふにゅ、

と柔らかいものが触れた。うわ、紬ちゃんとキス、してる……！

唇が重なっただけと言われるとそうだけど、それだけで、じわじわと満たされていくような気がする。さすがに少女漫画思考すぎるような気もしたけど、本当にそう思ってしまった。

唇を離すと、紬ちゃんがゆっくりと目を開ける。あれ、どうしよう、俺って本当に単純なのかも、さつきよりも紬ちゃんが可愛く見えて、たまらない。

「……、紬ちゃん、」

「……なんか、ドキドキするね」

そう言って、紬ちゃんが少し顔を赤くして笑うから、思わずもう一度、そのままキスをした。

「ん……っ」

重なって、離れて、時折、ちゅ、と小さく音がして。あ、やばい、もっと、

したい。

「紬ちゃ、ん、もっと、キス……、していい……?」

「ん……」

薄く開いた紬ちゃんの唇に、おずおずと舌を割り入れる。拒否されるそぶりはなくて、ぎこちなく何かを探す俺の舌に、ぬるり、と紬ちゃんの舌が触れる。

ドラマかどこかで見たキスを思い出しながら、ゆっくり舌を絡めてみる。くちゅ、と音がして、そこに一気に神経が集まったみたいだ。

くちゅ、くちゅ、と微かに響く音、絡まる紬ちゃんの舌が熱くて気持ちいい。

「……、ん、はあ……」

唇の隙間から紬ちゃんの熱っぽい息が漏れて、何かがぷつん、と切れた気

がした。

「ん、ふ、甘利、く……」

「ん……、はぁ……っ」

初めて聞く可愛い声に、夢中で舌を絡める。やばい、可愛い。いつの間に
か紬ちゃんがそつと俺の服の裾を掴んでいて、それさえも、たまらなく可愛
い。熱くて柔らかい舌が俺のそれと絡んで、気持ちいい。

うまく息継ぎができなくて、はぁ、と唇を離すと、少し目を潤ませた紬
ちゃんと目が合った。

「……っ、あ、ごめ、俺、夢中で……！」

「だ、大丈夫……」

「ごめん、その、気持ちよくて、いやっ、あの、」

「……ふふ、甘利くん、可愛い」

「えっ?! か、可愛いのは紬ちゃんでしょ……」

「えっ……」

「いっつも可愛いけど、その、可愛い声で我慢できなくなって……」

「い、言わないで」

「えっ、あ、ごめん?!」

顔を赤くして紬ちゃんは俯いてしまったから、慌てて体を離す。……、どうしよう、それもめっちゃくちゃ可愛いんだけど……

ああどうしよう、紬ちゃんが可愛すぎて、いつか理性がどこかに飛んでいくかもしれない……

いや、すでにちよっと飛びそう……



紬ちゃんと初めてキスをしてから、会うたびに必ずキスをするようになった。キスをするほどに紬ちゃんへの気持ちがいっぱいになって、もっと好きになっていく気がした。

今日は俺の家で映画を見ていたけど、見終えてふと隣の紬ちゃんを見たら、泣けるシーンがあったせいかわ目に涙を浮かべていて、あ、可愛い、って思ったらキスしてしまっていたわけで。

「紬ちゃん……♡」

「ん、ふぁ……」

泣いている顔も可愛いなんて言ったら、また紬ちゃんは恥ずかしがってしまうから、無理矢理飲み込んで唇を重ねる。なんでキスってこんなに気持ちいいんだろう、やばい、ずっとしていたい。

不意に、トン、と胸を押し返されて慌てて唇を離す。え、あ、どうしよう、

つい夢中でしてたけど、やりすぎた……？！

「ご、ごめ、ん」

「ん……、ちょっと、苦しかった、だけ……ごめん、ね」

やってしまった。最悪だ、がつつきすぎちゃったのかもしれない。そもそも気持ちいいって思っていたのは俺だけで、紬ちゃんはそうじゃなかったのかも。そりやそうだ、ついこの前初めてキスしたくせに。調子に乗るなよ童貞……！

「む、無駄に長すぎたよね、ごめん……」

「……、それは、いいんだけど」

「え？」

「あ、あんまり、いっぱいされると……」

そう言いかけて、紬ちゃんは俯いてしまった。あ、あんまりされると？

気持ち悪い？ うざい？

嫌な考えばかり巡って慌てている俺の手を、紬ちゃんがそっと掴む。掴むというより、触れるとか、重ねるとか、それくらいそっと。

「紬ちゃん……？」

「……、あんまり……、えっちなキスばかりされたら、」

………えっちな、キス……？？？

紬ちゃんから聞いたことのない単語に思わずフリーズする。視線を落とすと、俺の手に重なる紬ちゃんの手と、スカートから覗く膝を擦り合わせているのが見えた。

……え、あ、ええ？ いや、それはさすがに童貞の都合のいい解釈すぎる。だって、そんな、俺なんかのキスで、そんなわけない。紬ちゃんが、え、えっちな気分になるなんて、そんな。

……でも、もし、そうだった、ら？

「……『えっちなキス、ばっかりされたら』？」

「え……？」

「えっちなキスされたら、紬ちゃん、どうなっちゃうの？」

「あ……」

「紬ちゃん、」

そつと、紬ちゃんの顔を覗き込む。潤んだ瞳のまま、少しだけ唇を噛んでいるのが見える。

あ、やばい、可愛い。

「……………えっち、したく、なっちゃう、から」

「えっ……………！」

「……………つ、もお！ 甘利くんが、聞いたんでしょ……………つ」

「ごごご、ごめん！ 紬ちゃんからそんな、えっちなこと言われると思って

なくて……っ」

言わせたくせに、そんなストレートな言葉が返ってくると思っていないで、じゃあどんな言葉が返ってくるかまでは考えていなかったけど、だって、そんな。紬ちゃんの口から……、いや、それより女の子にとんでもない辱めを受けさせてしまった……

……でも。

恥ずかしそうに、そんなことを言う声が、姿が、紬ちゃんが、可愛くてたまらなくて、どうしよう。

「……、す、る？」

「……っ」

「ごめん、今俺、めちゃくちゃ興奮してる、かも」

正直、もうちんこは半勃ちだし、そんな風に言われたらえっちしたいに決まってる。でも、紬ちゃんに少しでも躊躇う気持ちがあるなら、我慢、できる。

……多分。

「紬ちゃん、あの、……っ」

言いかけたところで紬ちゃんの顔が近づいて、唇をふさがれた。柔らかい紬ちゃんの唇が、俺の唇をはむ、と甘噛みする。

え、あ、何そのエロいの、聞いてない、待ってよ……！

「つむ、紬ちゃ、」

「……、しよ……？」

あ、やば、完全に勃った。

「じゃ、じゃあ、しま、す」

「……、ふふ、はい」

なんだよ「します」って。紬ちゃんは笑ってるし、あれ、なんかこうえっちするときって、もっとムードとかあるもんじゃないの？ いや、ムードの作り方なんて知らないけど。そんなの学校で習ってないし。習うわけないけど。ああもうそんなこと考えてる場合じゃないのに……！

まず何をしたらいんどろうと紬ちゃんに視線を戻す。俺を見つめるいつもの違ってなんだか熱っぽい目、少し赤い頬、唇。ああ、さっきこんな可愛い唇が俺なんかとキスしてたんだ……

それからそのまま下へ視線を落としていくと、その、えーと……

「……そんな、じつと見ないで」

「あああ、ごめん！」

ブラウス越しとはいえ、おっぱいをじつと見つめてしまつて、慌てて視線

を逸らす。次つて何したらいいんだ、おっぱい触ってもいいのかな……なんて思っていたら、まだ俺の手に重なったままの紬ちゃんの手が、そつと俺の手を握った。

「……触っても、いいよ」

「……えっ」

いいんだ?! いや、俺の心読まれてる? それとも童貞丸出しで、全部顔に出ているのかもしれない。それどころか、もしかしたら声に出ちゃっていたのかもしれない。

「あ、ありがとうございます!」

「っふ、やだあ、それ」

「ご、ごめん、つい」

ムードどころか、お金払って触らせてもらうんじゃないんだから……と

心の中で自分にツツコミしつつ「失礼します」と一礼したいのを抑えて、そっとブラウス越しに、紬ちゃんのおっぱいに手を添えた。

……文字通り添えただけで、一瞬フリーズしてしまう。なんか、すごい、触っただけなのに、柔らかそうなのがわかる。

「……ボタン、外しても……いい？」

「ん……」

キラキラした可愛いらしい小さなボタンを、ひとつずつ外していく。ちよっと手が震えているかも、かつこ悪い。でもだって、外していくうちに胸元がはだけて、谷間が見えてきてるし……!!

ようやくすべて外し終わると、はらりと左右に開かれた布地から、ブラジャーに包まれた紬ちゃんのおっぱいが露わになる。ブラジャーは淡いピンクで、すごいなんか細かいレースと、谷間のところにはちよこんと小さなリボンが見える。こんな小さいリボンが世の中にあるのか……

とりあえず、そっと両手で包むように触れて、恐る恐る揉んでみる。

「……っん」

「ごめ……っ、痛い?!」

「ううん、大丈夫、だから」

「ブラの上からなのに、や、柔らかすぎ、ない？」

「き、聞かないでよお……」

「ご、ごめん！」

いやでも、柔らかすぎない……？ おっぱいってこんな柔らかいの？
ええ？ ふにふにと遠慮がちに揉んでも手の中であふたふと感じたことのない質量に、もはや感動してしまうのは初めてのおっぱいということ許してほしい。

「……脱がせても、いい？」

「……うん」

紬ちゃんの背中中に手を回して、ブラのホックを探す。あれ、これでいいのかなど、背中を撫でると、小さく紬ちゃんが息を漏らす。え……っちすぎる。待って、この時点でちよつと興奮してやばいのに。

もたもたとした手つきで、ようやくホックを外すことができ、ブラのカップが浮いて、下からぷるんとおっぱいが零れた。下乳……エッロ……

そつとブラを上にならずらすと、紬ちゃんのおっぱいが曝け出されて、思わず俺も息が漏れてしまった気がする。恥ずかしい。

「そ、想像より……」

言いかけたものの、大きいとか、綺麗とか、何を続けても変態くさいかもしれないと口ごもる。いやでも想像より柔らかそうだし、なんかもうやばい。さつきからやばいしか出てこない。元よりない語彙力なんてもうとつくだどこかにいってしまった。

「……甘利くん、想像してたの？」

「す、するでしょ、好きな子の……、そういうの」

そういうことばかり考えていたわけじゃないけど、そりゃあ想像くらいする。童貞ゆえに、ぼんやりとして解像度は低かったけど。

「……想像しただけ？」

「え……っ」

想像した、だけ。

……なわけではない。想像して、抜いたこともあるけど、そういう意味で言ってる？ あれ、バレてる？ え、紬ちゃん、意外とS……？ なの？

「甘利くん、顔真っ赤」

「紬ちゃん、あんまりいじめないでよ……」

「んふふ、ごめんね、可愛くて」

紬ちゃんは、よく、俺を可愛いという。俺のことを可愛いと言うなんて、紬ちゃんと、あとは俺のばーちゃんくらいだ。可愛い要素なんてどこにもないのに。可愛いのは紬ちゃんなのに。

……それに、可愛いより、かっこいいって言われたいのにな。紬ちゃんには。

「甘利く、……んっ」

さっきの紬ちゃんみたいに、食むように唇を重ねる。何度かキスをしていくうちに、紬ちゃんは時々上顎のあたりを舌でくすぐると気持ちよさそうにしてくれるのがわかった。ちなみにそれはいつか見た動画の知識を見よう見まねでやってみただけど、好きそうで良かった。

それからゆっくり舌を絡めて少しだけ吸うと、肩が跳ねる。でもだんだん俺も気持ちよくて余裕がなくなってしまうって、夢中で舌を絡めちゃうんだけど。

キスをしながら、優しくおっぱいも揉んでみる。うわ、やばい、触ってる

だけなのに気持ちいい。あんまり強くしないように、でもどれくらい力で触るのが正解かもわからない。というか、これは紬ちゃんは気持ちいいのかな？

やわやわと揉んでいると、不意に指先に硬いものが引っ掛かった。

「あん……っ！」

「えっ、ごごご、ごめん！」

「ち、違……、あ、当たった、から」

「え、あ、」

視線を落とすと、ツン、と紬ちゃんの乳首が硬さを帯びているのが見えた。

「乳首、立っちゃった、の？」

「ひ、あ……っ」

指の腹で、優しく触れてみる。控えめだけど、ぷくりと尖った乳首がめ

ちやくちやえっちで、可愛い。紬ちゃんも興奮してるんだと思うと、もう止められそうになかった。

「紬ちゃん、乳首、好き……?」

「き、聞かないでよお……」

「ごめん、俺、わかんないから……、ちゃんと教えてほしくて、その、紬ちゃんの好きどころ」

「……、す、き」

紬ちゃんは乳首が好き、脳に刻んでおこう。というか、乳首好きなんだ? え、えっち……

どういうふうに触ったらいいんだろう、優しくがいいのかな……?

指先でそつと、乳首を円を描くように擦ってみる。触れるか、触れないかくらい、優しく。

「こういうの、は? すりすりされるの、好き?」

「ん……っ♡ 好き……」

「じゃ、じゃあ、指でくにくにつてするのは……？」

「ああ……っ♡」

紬ちゃんの肩が、びくん、と跳ねる。可愛い、乳首弄られるの本当に好きなんだ、可愛い……♡ どんどん硬くなる乳首と、えっちな声を漏らす紬ちゃんが可愛くて、両方の乳首を同時に捏ねてみる。

「あっ、あん……っ♡！」

「はあ、可愛い……♡ 乳首硬くなってきた……♡ 気持ちいい……？」

「ん、あっ♡ ちく、び、気持ちいい……♡」

「可愛い……♡」

可愛いけど、もつともつと気持ちよくしたい、もつと紬ちゃんに気持ちよくなつてほしい……♡ 指だけじゃなくて、例えば舌で舐めたら、気持ちいいかな……？

「紬ちゃん、舐めてもいい……?」

「え、あ……っ」

「ごめん、舐めたい……♡」

「ああん……っ♡!」

否定されなかったことを都合よく言い訳にして、紬ちゃんの乳首を舌先で舐めてみる。ふると紬ちゃんの体が震えて、甘ったるいくらいに可愛い声が漏れた。

そのままぺろぺろと舐めてみると、硬いような、まだ少し柔らかいような、不思議な感覚を舌先に感じる。そんなはずなのにどこか甘いような気がして、夢中で舌を動かす。

——れろれろ♡ れろ……っ♡

「ん、ん、はあ、紬ちゃんの乳首……♡ はあ、可愛い……♡」

「あ、あっ♡ そんなに舐めちゃ、ああ、ん……っ♡」

少し赤く染まった乳首が、てらてらと俺の唾液で光っている。うわ、エロい。いつの間にか硬く勃起してる……♡ 可愛い、もっと……

——ちゅば♡ ちゅ、ちゅうう……っ♡

「あ、ああん……っ♡」

「ん……♡ もう細ちゃんの乳首、ビンビンだね、かあわいい……♡」
「あっ♡ 甘利、くん……っ」

ちゅばちゅばと乳首を吸いながら。反対は指で摘んでみたりする。頭の上の方から細ちゃんの甘い声が降ってきて、気持ちいいんだとホッとする。

コリコリになってきた乳首おいしい……♡ やばい、ずっと舐めていたい……♡

— れろれろれろ♡ ちゅう……♡

「あ、あっ……♡」

「ん、はぁ、可愛い……♡」

— れろ♡ れろれろ♡ ちゅ♡ ちゅ……♡

そのまま乳首を舐めていると、紬ちゃんが太ももをもしもじと擦りよせていることに気が付く。……え、もしかし、て？

「ん……っ、紬ちゃん、そっちも触る……？」

「あ……っ」

「ね、紬ちゃん、足広げて？」

「……っ」

「ね、紬ちゃん……」

太ももからスカートの中へ手を忍ばせると、遠慮がちに紬ちゃんが足を開く。でも、床にぺたりと座っているせいで、その先はよく見えなかった。もっと奥が、見たいのに……

「膝、立てて見せて……?」

「……っ」

「……やだ?」

ふるふると紬ちゃんは首を横に振ってから、ゆっくり膝を立てる。それから俺の方へ向けて、そのまま左右に足を開いた。一連の動きがなんだかすごくいけないことをさせている気がして、でも、一秒も目が離せなかった。

白くてもちもちしていそうな太ももの間には、ブラジャーと同じ淡いピンクのパンツが顔を覗かせる。それだけでもエロいのに、パンツの真ん中のあたりがほんの少し濃いピンク色に変わっている。

「紬ちゃん、ここ、色変わってる……♡」

「ひゃう……♡！」

人差し指で、そこを突いてみると、ぷに♡と少し指が沈んで柔らかくて熱い。外もこんなに柔らかいんだ、ここ。可愛い、紬ちゃんのおまんこ、ぷにぷに可愛い……♡

「乳首、気持ちよかった……？」

「う、ん……♡」

「はあ……、嬉しい……♡ 乳首で感じちゃうの可愛い……♡」

「あ、あっ……♡ 撫でない、で……♡！」

「はは、シミ出来ちゃってる♡ 紬ちゃん、すごいえっち……♡」

——すりすり♡ すりすり……♡

そのままパンツ越しに、指でゆつくりと擦ってみる。色が変わっていたおまんこの割れ目っぽいところを、指の腹を這わせるように何度も優しく上

下に擦っていく。じんわりと濃いピンクが広がってきて、紬ちゃんが可愛い声を漏らす。

「気持ちいい……？ パンツ、ぐちゅぐちゅになってきた……♡」

「あ、あっ♡ 見ない、で……っ」

「どうして？ はあ、えっちで可愛い……♡ もっとしたい……♡」

「あ……っ♡」

一番色が濃くなったそこをしつこく擦っていると、コリ、と何かが指の腹に引っ掛かった。

「……？ あ、これ、クリ……？」

「ひぁ……♡！」

確かめるように擦ると、控えめに膨らんだ突起が濡れたパンツに張り付いて、めちやくちやエロい。

紬ちゃんのクリ、ちっちゃいのに勃起しちゃうんだ♡ 女の子も勃起するのエロすぎ、可愛い……♡

「ね、パンツの上からでも紬ちゃんのクリ、ぷくってしてるのわかる……♡」
「あ、あ♡ 甘利く、待って、やあん……♡！」
「あは♡ クリなでなでしたら、足震えちゃうの？ 可愛い……♡」

—— すりすり♡ すりすりすり……♡

「やあんっ、甘利く、ああ……♡」

「はあ……♡ 女の子もここ、勃起しちゃうんだ……♡ 紬ちゃん、クリ気持ちい……？ 痛くない……？」

「ん……♡ きも、ち……い……♡」

「ん、クリもおまんこも、パンツにびとって張り付いて、すげーエロい……♡」

「あ、あっ♡ ああん……♡」

指を往復させるたびに、くちゅ、くちゅ、とエロい音が聞こえてくる。パ
ンツの下で、紬ちゃんのおまんこ、どうなってるんだろう。やばい、見たい、
紬ちゃんのおまんこ直接見たい……♡

「……っ、紬ちゃん、ね、紬ちゃんのおまんこ見たい……♡」

「……っ！」

「だめ……？」

「あ、明るい、し、恥ずかしい……」

「そ、そうだよね」

「……うん」

「……、紬ちゃん……」

「……っ、ちょ、ちょっとだけ……、なら」

「……！ うん！」

ちょっとだけ、ちょっとだけ……！

……ちよつとだけって、どういう……？　どうしよう、パンツ脱がすのはだめってこと？　でも脱がせないと見られないし、え、あ、どうしよう。

「甘利、くん……？」

「あ、あ……、うん」

……ちよつとだけ、ちらつと見るだけ……

膝を立てたままの紬ちゃんの膝に手を添えて、もう少しだけ足を開く。えつと、どうしよう……、ちよつとだけ見えるように、パンツずらしてみようか、な……

紬ちゃんのパンツの縁に指を引っかけて、ちよつとだけ横にずらしてみる。ゆつくりとパンツの下から紬ちゃんのおまんこが見えてきて……、いや、待て、これすげーエロくない？　全部脱がせるよりなんか逆にエロいのは……？！

「そ、そんなに、見ないで……」

「ご、ごめん……、わ、ぬるぬるで光って、エロ……♡」
「や、あ……っ」

ちよつとだけと言いつつ、指を止めることができずに端までずらすと、いやらしく濡れたおまんこが丸見えになる。うわあ、こんなふうに濡れるんだ……。なんかちよつと、ヒクヒクしているのもエロい……

「紬ちゃんのおまんこ、ヒクヒクしてる……。ね、触ってないのにもっと濡れてきた……」

「や……っ、恥ずかし……。い」

「恥ずかしいのに濡れちゃうの？ 紬ちゃんのおまんこ、えっちすぎない

……♡?」

「もお……っ、私ばかり、やだあ……」

「ごごご、ごめん！ そういうつもりじゃ……。っ！ 俺のも、み、見せるから……っ」

「えっ……」

恥ずかしさからか、紬ちゃんの目が潤んでいることに気が付いて、慌ててパンツを元に戻す。

ベルトを外してデニムを脱ぎ捨てると、俺の方こそもうガチガチに勃ってるし、我慢汁でパンツも亀頭の部分にシミができています。

「お、俺も紬ちゃんのえっちな姿見て、めちゃくちや勃ってるし！ お互いさまというか、えっと……っ」

「う、うん……」

いや、俺のも見せるってなんだ、別にこんなの見たくもないだら……、と一瞬冷静になったけど、もう遅い。

……、やばい、パンツ越しとはいえ、紬ちゃんにこんな勃起ちんこ見られていると思うと、恥ずかしいのに興奮する。いや、そういう癖があるはずでは……ない、けど……！！

……あ、ちょっと待て。

「……あの、紬……、ちゃん」

「う、ん……？」

「あの、俺……、ゴム、用意してなくて……」

……俺のばか！ いや、今日はそういうつもりじゃなかったし、というか、いつかは紬ちゃんと言っちゃいたって思ってたけど、紬ちゃんだってしたいと思ってるかわからなかったし、同意も得ていないのに勝手に買うのってどうなんだ？と未だに買えずにいた。

いや、同意を得てから買いに行くのもおかしいのか？ ああもう、正解がわからない。とりあえずもう、今ここにゴムはないわけで。

「あの、俺は紬ちゃんといつかしたいって思ってたけど、紬ちゃんの気持ち聞いてなかったし、その……」

「……、うん」

「い、一緒にいられるだけで幸せだし、その、」

「……、私も」

「えっ？」

「甘利くんと、えっち、したいと思ってる、よ」

『甘利くんとえっちしたいと思ってるよ』。頭の中でエコーがかかったみたい。その一言が何度も響き渡る。……夢？ いや夢でたまるか。

「こ、今度、ゴム買ってくる、から！」

「……うん、でも、甘利くん、は……」

ちら、と俺のちんこに紬ちゃんの視線が刺さる。もうガチガチのそれを収めるには正直抜くしかない。

「……ごめん、ちょっと抜いてきていい……？　ほんとごめん」

「だ、大丈夫？　手伝う……？」

「てっ、手伝うって……？！」

「え、あつ、えっと、わ、私にできることがあれば……って思ってた……、ごめん、何言ってるんだろ……！　忘れて……！」

「い、いや、嬉しいけど……！　でもあの、初めて……は、俺、紬ちゃんと一緒に気持ちよくなりたいというか、その……」

紬ちゃんがどう手伝ってくれるのかはわからないけど、やっぱり二人で一緒に気持ちよくなりたいし。……いや、童貞のくせに気持ちよくなれるかは自信ないけど。ああ、来たる日のために勉強しなきゃ……

「……、一人で、する、の？」

「え、うん……、収まりそうにない……、し」

「……」

もぞ、と紬ちゃんが膝を抱えて擦り合わせる。あ、え、もしかして紬ちゃん、も……？

「……も、もうちょっとだけ、一緒にする……？」

「え……っ？」

「い、いや、挿れないけど！ えっと、あ、例えば……、だけど」

膝に手を添えると、ぴくりと肩が震えた気がしたけど、そのまま左右に開こうとする俺の手を拒まれることはなかった。

開いた足の間に、体を割り入れる。不安そうな、でも何かに期待しているような紬ちゃんの目に、またちんこに熱が集まる気がした。

紬ちゃんのパンツ越しの割れ目に沿うように、俺もまたパンツ越しのちんこを押し当てる。うわ、おまんこ、柔らか……♡

「あ……っ♡」

「っ、はあ、こうやって擦ったら、紬ちゃんも、気持ちいい……？」

「あ、ん……っ」

紬ちゃんの膝に手を添えたまま、ゆっくりと腰を揺らしてみる。あ、やば

い、思ったより紬ちゃんのおまんこの感触がちんこに伝わって、気持ちいい……♡

紬ちゃんはというと、恥ずかしそうに抱き着いて俺の胸板あたりに顔を埋めてしまったけど、そこに感じる吐息は熱くて、くぐもった可愛い声が聞こえた。

「紬ちゃん……っ♡」

「あっ、ん……♡！」

たまらず紬ちゃんをラグの上に押し倒し、ぐり、と割れ目にさらにちんこを押し付ける。パンツ越しにぴったりとおまんこに密着して、熱い。ちんこを擦りつけるように数回腰を揺らすと、どちらともなく、くちゅ、と音がする。

「……っ、はあ、紬ちゃん、まだおまんこ濡れてる……♡」

「あっ、あ……♡」

「はあ、パンツ越しでも気持ちいい……♡ はあっ、紬ちゃん、は？ おま
んこ、気持ちいい……っ？」

「あっ、ん……っ♡ うん……っ」

「はあ、やば、ほんとにえっちしてるみたいで、ちんこやばい……♡」

疑似セックスみたいだなんて夢中で腰を揺らすと、まだ硬くなるのかと
いうくらい勃起していくちんこに自分でも驚く。やばい、気持ちいい、でも、
もっと……っ

「っは、あ、紬ちゃん、もっと、紬ちゃんのおまんこでくちゅくちゅしたい
……っ」

「あ、あん……っ♡！」

とうに窮屈だったパンツを下ろすと、ぶるんっ、と効果音が付きそうなく
らいの勢いで勃起ちんこが飛び出す。お腹に付くんじやないかというほど
に勃起していて、めちゃくちゃ興奮しているのが紬ちゃんにもバレてしま

う。

「甘利、く……」

「ごめん、紬ちゃんのは脱がさないから、まだしてもいい……？」

「あん……っ♡！」

ちんこを握って、紬ちゃんのパンツの色濃い部分に亀頭をぐりぐりと擦り当てる。布が一枚減っただけで、さっきより紬ちゃんのおまんこの柔らかさを感じて、多分ちんこは我慢汁だらだらかもしれない。

「パンツぐちゅぐちゅにしちゃってごめんね……っ、はあ、紬ちゃんのおまんこにちんこ擦りつけるの、めちゃくちゃ気持ちいい……♡」

「あ、あっ♡ はあっ、甘利、くん……♡！」

「ん、はあ、紬ちゃ、おまんこ気持ちいい……っ？」

「ああん……っ♡！ 気持ち、い……♡」

「はあ、嬉し……♡ 可愛い……っ♡」

「……っ、あ、甘利く、も、っと……♡!」

「え、あ、紬、ちゃん……っ?」

紬ちゃんの手が下りてきたかと思うと、濡れたパンツの真ん中に、さっきの俺みたいに指を掛ける。紬ちゃんの指がゆっくりと横に布地をずらして、え、え、待って、え……っ?

「つむ、紬ちゃ、」

「……っ、直接、して……?」

……自分でパンツずらして、おまんこ見せて、そんなこと言う……?!

「……っ、紬ちゃん、エロすぎなんだけど……っ」

「あぁん……♡!」

ぐっと紬ちゃんのパンツを上を持ち上げるように引っ張り、おまんこ

パンツの間にちんこをねじ込む。手を離すと、ぐちゃぐちゃの紬ちゃんのパンツがペチン、と俺のちんこに張り付いた。

紬ちゃんのパンツに俺のちんこの形が浮き上がって、視覚的にもやばいけど、何より生で感じる紬ちゃんのおまんこの感触。熱くて、柔らかくて、ぬるぬるで、やばい……♡！

「はあ、見て、紬ちゃんのパンツの中、俺のちんこ入ってる……♡」

「あ、やあん……っ♡」

「っはあ、紬ちゃんの生おまんこ、やば、すっごいぬるぬる……♡！」

「あ……っ♡！」

我慢できずに腰を揺らすと、紬ちゃんのパンツの中で、ちんこがぐちゃぐちゃとおまんこを擦る音が響く。可愛らしいレースのパンツはもう俺の勃起ちんこに侵されて、ひどく興奮する。

「あっ♡ ああん……っ♡！」

「はあ、紬ちゃんのおまんこと俺のちんこ擦れて、やば、気持ちいい……っ♡！」

挿れていないのにこんな気持ちいいなんて、挿れたらどうなっちゃうんだろう、いや、もうよくわからない、とにかく今気持ちよくて、紬ちゃんが可愛くて、頭が回らない……！！

——ぐちゅっ♡　ぐちゅっ♡　ぐちゅぐちゅぐちゅ……っ♡

「あ、はあ、紬ちゃん……っ♡　あ、ぐちゅぐちゅすご……っ♡」
「あぁっ♡　あ、あ♡　んう……っ♡」

——ぐちゅぐちゅぐちゅ……っ♡　ぬちゅぬちゅ……っ♡

「あっ、う、紬ちゃ、はあ、紬ちゃん……っ♡　もお、俺、やばい、かも……っ♡」
「ん……っ、はあ、甘利く、ん……っ♡」

「あ、はあ、出ちゃう、あ、あつ、出る……っ！」

びゅるる、とあつという間に勢いよく射精し、腰がびくびくと震える。いつもよりめちゃくちゃ出たかも、なんて、射精感でまだぼんやりした頭で考えていた。

……いや、待て、出たかもじゃないだろ……！！

視線を下ろすと、紬ちゃんのパンツどころか、おへそのあたりまで白くどろりとした精子が飛び散っているのが見えて、サーっと一気に血の気が引く。

「……っ！　ごめ、紬ちゃん、俺……っ」

「ん……」

「い、今拭くから、ティッシュ……っ！」

慌ててパンツからちんこを抜いて、ティッシュの箱に手を伸ばす。紬ちゃんにぶっかけるなんて、まだえっちもしたことないのに何をしてんだ俺は……！ いや、えっちしたらぶっかけていいとかそういうわけじゃないけど……！

「ごめん、ごめんね、俺、気持ちよすぎて……！」

「わ、私こそ、ちょ……、直接してって言ったから……」

「いや、紬ちゃんにぶっか……、いや、ごめん」

ぶっかけなんて口にするのもどうなんだと、もによもによと言葉を濁し、拭き取ったティッシュを丸める。とろんとした目の紬ちゃんを見てるとまたすぐに勃ってしまいそうで、わざとらしい咳払いをしてごまかした。

どちらのものかわからないほどに濡れた紬ちゃんのパンツは、どうやっても穿いて帰れないだろう。洗濯したほうがいい、よな……？

「ごめん、つ、紬ちゃんのパンツ、洗うね」

「えっ……！　そ、それは恥ずかしいかも……、じ、自分で洗うから大丈夫」

「そ、そうだよね、ごめん！」

「か、体拭きたいから、タオル借りてもいい……？」

「う、うん！」

ちんこ丸出しでうろうろするのもと脱いだパンツをとりあえず穿き直し、洗面所へタオルを取りに行く。紬ちゃんに渡すタオルをお湯で濡らしながら、さっきのは本当に現実だったんだろうかと反芻していたら、紬ちゃんがドアの隙間から顔を覗かせた。

「あああ、ごめん！　待ってね、今絞るから！　あ、熱くはないと思うけど、気を付けてね」

「……ありがとう」

「あっ、パンツここで洗っていいよ、俺部屋戻ってるから……」

「……甘利くん」

洗面所から出ていこうとする俺の服の裾を、紬ちゃんがそっと掴む。

「……、今度会う時まで……、買っておいてね」

「……え？ ……あっ」

何を、なんてさすがに聞かないけど。え、そんなこと言うの？ 待ってよ、ちよつとそれはもう、童貞には刺激が強すぎる……！

「かつ、買っておきます！」

「あは、声おっきい」

「ご、ごめん」

人差し指を立てて「静かに」と紬ちゃんは笑った。